

ラシーヌ悲劇について ―その5―

『ベレニス』

戸 口 民 也

愛しながら私は去り、ティテュス様も私を愛しながら、私と別れる。

(V. 7.)

ローマ皇帝ティテュスとパレスティナ女王ベレニスは、愛し合いながら別れねばならない。何故か。ローマがそう望むからである。皇帝の位に即いたティテュスは、ローマの、そして全世界の支配者となった。絶対の権力を手にした彼には、もはや不可能なことはない。すべては許されている。ただし、ひとつだけ条件がある。それは、ティテュスが皇帝としてローマの掟を守り、ローマの意志を体現する限りにおいて、という条件である。

ティテュスはベレニスを愛し、結婚を誓ってきた。だが、

ローマ人の中では、結婚の相手はローマの女しか認めません。

ローマは王位にある者すべてを憎んでいます。ところがベレニス様は女王でいらせられる。(I. 5.)

ティテュスとベレニスの結婚をはばむ理由はこれだけである。しかし、これだけで既に十分すぎる理由である。

ティテュス様は私を愛している、あの方にはどんなこともできるのです。

(I. 5.)

とベレニスは信じている。そう信じたいと思っている。「だが」とティテュスは言う。

……私が皇帝の位を受けた時、  
ローマはその法を守るよう私に誓わせたのです。  
法は守らねばなりません…… (IV. 5.)

だから二人は別れねばならない。ティテュスはベレニスに、結婚を断念し、ローマから去るよう命ずる。ベレニスも結局はその命に従う他ない。そして劇は、ローマを去ろうとするベレニスがティテュスに最後の別れを告げるところで幕を閉じる。二人の愛の証人であり、また自らも秘かにベレニスを愛し続けてきたコマジュースの王アンティオキユスの「ああ、」という歎きと共に。

以上が『ベレニス』の概要である。ラシーヌは『ブリタニキユス』に続いて再びローマの歴史に悲劇の題材を求めた。しかし『ベレニス』は『ブリタニキユス』とは全く対照的な作品である。この劇にはネロンやアグリピーヌのような怪物も、ナルシスのような卑劣漢も登場しない。ここでは権力をめぐる争いも、憎しみや恨みに根ざす対立も、陰謀や罪無き者に対する迫害、暗殺といった陰惨な事件も起こらない。ここに登場するのは、後に「人類の愛であり歎び」(スエトニウス『十二皇帝伝』「ティトゥス」第1節)とまで称讃されることになる善帝ティテュスであり、そのティテュスが——少くともラシーヌの設定によれば——「美しさも名譽も美德も、すべてあのひとには備わっている」(II. 2.)と言うベレニスである。そして、ラシーヌがこの劇に加えたもう一人の主要人物アンティオキユスは、ベレニスへの満たされぬ恋に苦しみながらも、最後までティテュスとベレニスに対し忠実な友であり続ける。

それぞれに美德を備えたこの三人が、それでは情熱とは無縁の世界に生きていくのかと言え、決してそうではない。彼らもラシーヌ的人物にふさわしく情熱に苛まれ、恋が成就し得ぬと知れば追いつめられ、混乱し、絶望のあまり自暴自棄的になりさえする。だが彼らにはもう一方で美德という《かせ》がはめられていることにも注意しなければならない。『ベレニス』は、ティテュスとベレニスの愛と別離のドラマであるだけでなく、善帝ティテュスの誕生のドラマをもなしているからである。善帝の誕生は、流血や死によってではなく、美德の勝利によって飾られねばならない。それゆえ彼らはいかに絶望しようと

も自暴自棄に陥ることは許されないのである。ティテュスはローマの掟に従い、ベレニスはティテュスを愛するがゆえに永遠の別離を受け入れる他ない、ということだ。

『ブリタニキユス』の主題は怪物の誕生だった。その結末は流血と恐怖に彩られていただけでなく、ついに本性をさらけだしたネロンのとどまるところを知らぬ暴政の第一歩をなしていた。これに対して『ベレニス』は、スエトニウスによれば(前掲書「ティトゥス」第7節)すべての人々から「第二のネロン」とみなされるほど悪評の高かったティテュスが、異邦の女王との愛を断念することによって、称讃と祝福に満ちた治世を開始する第一歩をなしている。『ベレニス』が『ブリタニキユス』とは全く対照的な作品というのも、こうした点を見ても明らかであろう。

それではこの二作に共通するラシーヌの特徴は一体どこにあるのだろうか。それを問題にせねばならない。

※ ※ ※ ※

『ベレニス』では、呪われた血筋、悪への衝動、人間を破滅へと導く狂暴な情念といったモチーフは影をひそめている。また、これまで私がラシーヌ悲劇の核心をなすものとして取り上げてきた悪の存続の問題も、ここには現われていないようにみえる。人々が恐れていたのとは反対に、ティテュスは「第二のネロン」とはならず、過去の悪徳から脱却し、あらゆる美德を備えた善帝となろうとしている。その試みは、ベレニスへの愛ゆえになされたものであり、しかもベレニスの愛ゆえについに成就することになった、とラシーヌは強調する。とすれば、これは愛と美德の勝利のドラマなのだろうか。自己の悪しき過去だけでなく、カリギュラやネロンといった怪物たちを次々と生み出してきたローマの悪しき過去をも断ち切ることに成功したティテュスの栄光のドラマなのだろうか。そしてもうひとつ付け加えるならば、『ベレニス』は従来のラシーヌ悲劇とは対照的な、つまりラシーヌ自身にとってもこれまで『ラ・テバイッド』『アンドロマック』『ブリタニキユス』で描いてきた悲劇的世界との訣別を意味する作品と言えるのだろうか。

しかし、『ベレニス』においては、悲劇の中心的テーマが悪の問題から美德の問題へと変わっているのは事実だとしても、ラシーヌ悲劇のもうひとつの重要なテーマをなしてきた過去への隷属という問題は、ここでも依然として提示されている点に注目しなければならない。

確かにティテュスは、彼自身の忌むべき過去を振り捨てることができた。それもすべてベレニスとの出会いによるものだ、とティテュスは言う。

若き日の私は、ネロンの宮廷に育てられ、  
悪しき手本に惑わされて道を誤り、  
たやすいといえばあまりにたやすい 墮落の坂を、  
快楽に溺れて下っていた。

その私の心をベレニスがとらえたのだ。愛するひとの心に叶うため、  
この心を征服したあのひとを勝ち得るため、できぬことなど何があるう。  
(Ⅱ. 2.)

そして今、彼は全世界の歓呼のうちに皇帝の座に即いた。こうしてティテュスは、自分の過去だけでなく、ローマ自体につきまとっていた怪物たちからも、自己を、そしてローマをも解放することに成功したかのようにみえる。ところが皮肉なことに、その代償として彼はもうひとつの過去——彼にとって他の何にも代え難いベレニスとの幸福な愛という過去——をも同時に捨て去ることを要求されているのである。

ティテュスは自分の身にローマの、いや全世界の視線が集中していると感じている。自分の一挙手一投足が世界の運命を左右するほどの意味を持ち、人々は彼とベレニスとの恋の行方を固唾をのんで見守っているのだと。

さて、ポーラン、ローマは私の意図をはかりかね、  
女王の身の上がどうなるかを待っている。  
あの方の心と私の心の秘め事は、  
今では全世界が取り沙汰するところとなった。(Ⅱ. 2.)

皇帝としての自己を全うするためには、ローマが、そして全世界がティテュ

スに期待する理想的皇帝のイメージにあくまで忠実に振舞わねばならない。それゆえティテュスは、ローマは何を考えているのか、何を自分に求めているのかと常に自問し、なおかつ腹心のポーランに尋ねずにはいられない。

女王と私のことで、民の声は何と言っているのだろうか。(Ⅱ. 2.)

だが、その答えは明らかである。ローマは王族を憎んでいるのだ。

疑う余地はございませぬ、陛下。正気にせよ気紛れにせよ、  
ローマはあの方を皇后に望んではおりませぬ。(Ⅱ. 2.)

ティテュスはかつて皇帝の位を望みさえした。それもすべて、

ベレニスを皇后の位にあげ、  
いつの日かその愛と貞節に報い、  
世の人すべてが私と共にあの一の足下に跪くのを見たいと思えばこそ。  
(Ⅱ. 2.)

ところが皇帝となるや、彼は思い知らねばならなかったのである。「愛するひとのものとなるどころか、自分自身を捨てねばならぬ」(Ⅱ. 2.)と。

ティテュスはベレニスと別れねばならない。ローマがそう要求するからである。腹心ポーランの口をかりて表明されたローマの歴史そのものが、異邦の血を拒否し、王族との婚姻を拒絶している。しかもこの掟は、ネロンやカリギュラといった怪物たちでさえ恐れ、ついに破ることがなかったというのである。とすれば道はひとつしかない。ローマの意とするところを体現し、皇帝にふさわしい名誉と美德とを全うするだけである。それはまた、ティテュス自身がベレニスとの出会いを通じ、彼女への愛を契機として選んだ道の行き着くところではなかったか。

だがこれは同時に、ベレニスに対する残酷な裏切り行為にも通ずる。

この私が今あるのも、ポーラン、すべてあの一とゆえのこと。それがなん

と残酷な報いか、

この身のためにしてくれたことすべてがあの一には仇となる。

これほどの名誉、これほどの美德、その礼として

私は言おうというのだ、「おたち下さい、そして二度と私にお会い下さるな」と。(II. 2.)

とはいえ『ベレニス』が善帝の誕生のドラマである以上、ティテュスの決意がベレニスに対する背信行為のまま終ってはならぬことも確かである。ローマの栄光を体現すべき皇帝は忘恩の徒であってはならない。たとえ彼が、ベレニスと別れることによって全ローマの称讃をかち得たとしても、彼の意識の底に一種のうしろめたさが残るようだとしたら——また劇を見る観客の心にそうしたわだかまりのようなものが残るとしたら——彼の名誉も美德も結局はまがいものにすぎなくなってしまうだろう。それゆえティテュスの決意は何としても正当化されねばならない。さもなければ、『ベレニス』も悲劇としての格調を失いかねぬからである。そこでラシーヌが配慮したのは、ティテュスの決意をローマの意志という至上命令によって正当化するだけでなく、そうした決断へと追い込まれた彼の絶望の深さを強調することによって、ベレニスの心を——そして同時に観客の心をも——説得することであった。

この決意ゆえに私がどれほどの苦しみに苛まれるか、それは承知の上のこと。

あなたと別れては、もはや生きてはゆけませんまい。

私の心まで、今や私から離れようとしているほど。

けれども生きることはもはや問題ではないのです。統治せねばなりません。(IV. 5.)

統治すること——それが今では問題なのである。ベレニスと別れることは生きるのを放棄するに等しい。だが、絶望に耐えてでも統治する運命を引き受ける他ない、とティテュスは言うのである。それに、この決意がどれほど苦しいものであるかを、もしもベレニスが理解せず、あくまで裏切り行為だと言うの

であれば、自分にはもはや絶望に耐える力さえなくなってしまう、とも。だから彼にできるのは、ひたすらベレニスに訴えかけることだけである。

責めて下さいますな、不幸な君主を。

[……]

それよりも、あのお心を取り戻していただきたい、幾度となく

この私に義務の命ずる声を聞かせて下さったあのお心を。

今こそその時なのです。強いてでもあなたの愛に沈黙を命じ、

名誉と理性に輝く目で、

私の義務がどれほど厳しいものか、とくと見つめていただきたい。

あなたに逆おうとするこの心を、あなたの力で強めてほしいのです。

できるものなら私を助けていただきたい、くじけそうになるこの心に打ち勝てるように、

こらえようとしても流れてやまぬこの涙を抑えることができるように……

(IV. 5.)

しかしベレニスはティテュスの訴えに耳をかそうとはしない。それどころか、ティテュスの《変心》をなじり、自殺してこの屈辱をはらすと共に、ティテュスに復讐してやるさえ言うのである。これはティテュスが最も恐れていた事態である。なぜなら彼は、別れよと宣告することは「私が恋を捧げるひと、私を愛してくれるひとの心を刺し貫くこと」(IV. 4.)に他ならないと知っているからであり、またそうと承知しながら別れねばならぬ苦しみをベレニスに伝えられぬとなれば、これまで彼を支えていた名誉も美德もすべて無と化してしまうとさえ思っているからである。もしもそうなれば、彼もまたベレニスと同様、絶望のあまり自暴自棄に陥る他ない。今や統治することだけが問題だとしても、あくまで善帝として統治するものでなければ無意味である。ところが、ベレニスを裏切り、彼女を死に追いやることではか治世をはじめられぬのであるとしたら、たとえ全ローマ、全世界の祝福を受け、後世に残る名声を得たとしても何になるというのだろうか。

いいや、もうよい。私は冷酷非情な人間だ。

私自身、この身が憎い。あれほど忌み嫌われていたネロンでさえ、

これほどまでに残酷だったことはなかった。(IV .6.)

奇妙な矛盾と言わねばなるまい。ティテュスは第二のネロンにはなるまいと決意し、善帝として統治する道を選んだはずだった。ところがその彼が善政の第一歩としてなさねばならぬのが、彼に立ち直るきっかけを与えてくれたベレニスを裏切り、彼女に対して死ねと言うに等しい命令を下すことなのである。つまり善帝であろうとすれば、暴君になるのとは確かに違った意味においてではあるが、主観的には暴君と変わらぬ——というよりは暴君以上に——「冷酷非情な人間」となる他ない、ということだ。そこにティテュスの苦悩があり、しかも、意を決してベレニスに本心を明かしてもなお彼女を説得するに到らぬために、彼の絶望は一層深くなる。

ああ、ローマ！ ああ、ベレニス！ 不幸な君主よ！

何故皇帝になどなったのか、何故愛してしまったのか。(IV .6.)

『ベレニス』における過去との訣別のドラマは、こうして過去への隷属のドラマといった様相を呈してくる。既に振り捨てることに成功したはずの《怪物ネロン》の影が今なおつきまとって放れぬばかりか、ネロンという忌わしい過去をも含むローマの歴史全体が絶えずティテュスの意識を規制し、その行動を束縛するのである。つまりティテュスは、彼自身の悪しき過去から逃れようとして、逆により古く、より強力な過去にとらえられる結果になったと言えるだろう。その《より古く、より強力な過去》とは、怪物や暴君だけでなく、数多くの英雄たちをも生んできたローマの歴史であり、その歴史の中から生まれた栄光に輝くローマという《神話》に他ならない。

皇帝となったティテュスに要求される最も重要な事柄は、実はこの《神話》の継承者となり、また彼自身も神話的人物の一人となることである。「第二のネロン」ではなく、ローマ史の輝ける部分を象徴する理想的な皇帝として君臨し、「人類の愛であり歓び」と後の世まで語り伝えられるほどの名声を得るこ

と——それが「今や統治することのみが問題だ」というティテュスの言葉の真の意味であり、何よりもそれが、ティテュスに課せられた運命だったのである。

＊ ＊ ＊ ＊

とすれば、劇の結末もおのずと決まってくるだろう。悲劇の題材をなす《歴史的事実》がまず劇の設定や筋の展開に一定の枠をはめているからである。ラシーヌは必要とあらば伝説や歴史を自己流に改変することも辞さないが、改変にあたってはその論拠を入念に探すなどして、常に慎重に振舞っている。それに、神話や伝説が題材であれば作者の自由もまだ発揮しやすいが、例えばティテュスのように多くの人々に知られている歴史上の人物を主人公に選ぶとなると、一層慎重にならざるをえないだろう。その人物について観客が抱いているイメージと真向から対立するような設定は避けなければならない。同時代の通念ないしは常識を最大限尊重しながら、なおかつこれに逆わぬ範囲内で作者の自由をできるだけ発揮する——これがラシーヌの基本的立場であり、またフランス古典主義作家たちに共通する姿勢でもある。

それゆえラシーヌは、史実に反する結末は避け、『ベレニス』を善帝誕生のドラマとして終わらせることにした。当然、ティテュスの名誉と美徳は救われねばならない。序文を読むと、ラシーヌはベレニスを自殺に追い込む結末も考えなかったわけではなさそうだが、ティテュスの治世の第一歩がベレニスの血によってあがなわれるという設定は、史実に抵触するだけでなく、劇の主題にもなじまないと判断したのだろう。そこで悲劇は、ティテュスとベレニスの別れをもって幕を閉じることになる。そして、もう一人の主要人物アンティオキウスも、ティテュスとベレニスにならい、絶望を引きずったまま生きながらえることになる。しかしその結果、ラシーヌは流血も死者もない悲劇に挑戦することにもなった。

「悲劇においては流血も死者も必要不可欠なものでは決してない。そこで扱われる事件が偉大であり、登場人物たちが英雄的であり、情念がかきたてら

れ、悲劇の楽しみをすべてをなすあの荘重なる悲哀が全篇を通じて感じられさえすれば、それで十分である」とラシーヌは『ベレニス』序文で語っている。この主張は決して間違っていない。流血も死者もない悲劇はすでにギリシャ悲劇に先例があり、もっと近いところでは、例えばコルネーユの『シンナ』をあげることもできる。そして、他ならぬラシーヌの『ベレニス』自体、作者の主張の正当性を裏付ける新たな実例となるわけである。

だが、現実には流血も死者もない悲劇をつくり上げるとなると、それほど容易ではない。ラシーヌ自身、『ベレニス』を除いては、そうした悲劇は一篇も書いていないのである。

人間が自らの意志や努力によっては如何ともしがたい圧倒的な力と対峙せざるをえなくなったとき、しかも人間が、自己の限界を知りながら、なおかつその力に立ち向かおうとするとき、悲劇的状况が生ずる。そのとき人間が対決する力は、普通は運命ないし宿命という名であらわされるが、それが最も明瞭に示されるのは、人間がこの力について打ちかつことができぬと思知らされたときであり、そして人間のこうした敗北は、多くの場合、死をもって表現されるのである。何故なら、運命に立ち向かおうとする人間の努力は、まさに彼に課せられたものとは異なる運命を自らの力で作り出し、それを生きようとするところにあるのだが、その努力が結局のところ予め彼のものとして定められていた運命を成就するためになされたに他ならなかったと証明されたとき、悲劇もまた完成されるからである。そして、人間の運命とは何かと言え、人間とはついに限られた存在でしかなく、しかもその限界を何よりも明らかに示すものこそ死である、というところに帰するからである。悲劇が人間の運命を基本的モチーフとする限り、そこに人間の限界に対する認識——つまりは死の影——が絶えずつきまとうのも当然と言えらる。現実には悲劇作品の多くが主人公の死をもって終るのも、そう考えれば決して理由のないことではないのである。

それゆえ、流血も死者もない悲劇が成立するにしても、少なくともそこには人間を否応なく屈服させる力、人間を超えた力の存在がはっきりと感じられなければならない。現実には死ぬ人物が一人もいなくとも、死に等しい、あるいは死にまさる苦悩と絶望とが、主人公の行動を通じて観客にも伝わり、劇が終った

時には、すべてはこうなるしかなかったのだという痛切な思いが登場人物全員に、そして観客に、等しく感じられなければならない。そうあってはじめて、流血も死者もない悲劇が可能となるのである。

ラシーヌは、『ベレニス』を書くにあたって、主人公を一人も死なせないという条件を自らに課した。すなわち、ティテュスにもベレニスにも、更にはアンティオキウスに対しても、死を絶望から逃れる手段とすることを禁じたのである。「生きることはもはや問題ではない」というティテュスの言葉は、もはや死ぬことすら許されないのだ、ということも同時に意味しているのである。だからこそ、そうした運命に逆ってベレニスはティテュスの訴えを拒み、死のうとする。そしてティテュスも、ベレニスが死ぬのであれば自分も生きてはいないと言って詰め寄る他なくなる。しかもこれにアンティオキウスまで加わり、同じように死の決意を告げるのである。

だが、悲劇には《よりましたな》解決はあり得ず、常に《最悪の》結末へと行き着かねばならない。そして『ベレニス』の場合、最悪の選択とは、死ぬことではなく、生き続けることにあるのだ。ティテュスの名誉と美徳が血によって汚されてはならない。彼は生きて統治する運命にある。従って、ベレニスも——そしてティテュス自身も——いかに絶望しようとも、この運命を変えることはできない。だからベレニスは、最後にはこう言う他なくなる。

私は生きてゆきます。絶対の御命令に従います。(V. 7.)

そして彼女は、自分が死を断念したように、ティテュスとアンティオキウスにも生き続けるよう言い残して立ち去るのである。

お別れいたします。私たち三人が世の人々に、

切なくも不幸な恋のまたとなき鑑となり、

その悲しい物語がいつまでも語り伝えられますように。(V. 7.)

ラシーヌの言う「荘重なる悲哀」が単なる論戦用の主張にとどまるか、それとも真に妥当性をもった主張となるかは、おそらくこの最終場におけるベレニ

スの言葉がどれだけの説得力をもって観客に伝わるかにかかっているだろう。もしもこの言葉のなかに、やがて訪れてくるはずの死の時まで——というよりも、死を超えて永遠に——絶望を生き続けるべく運命づけられた人間の痛切な思いがききとれたとすれば、流血も死もない悲劇を試みたラシーヌの賭も成功したと言ってよい。

米 米 米 米

既に見たように、『ベレニス』の主人公たちはいずれも数々の美德を備えている。しかし、こうしたことは救いや喜びをもたらすどころか、逆に不幸と災いを引き寄せることにしかならない、というのがラシーヌ悲劇のいわば鉄則である。身の潔白を守ろうとする人物はほとんど常に無力な立場に置かれ、美德は悪に染まった世界を救う力とならぬばかりか、自分の身につきまとう不幸を避ける力にすらなり得ない。それは、アンティゴヌとエモン、ジュニーとブリタニキユスの例を見ても明らかだろう。彼らは、憎しみ、野心あるいは理不尽な恋といった情熱に憑かれて破滅へとひたすら向かってゆく人物たちの葛藤に巻き込まれ、非業の死を遂げるか、自殺あるいは自殺に等しい決断へと追い込まれる。さもなければ、アンドロマックのようにたまたま生き残ることができたとしても、いわばその代償として今度は自分が第二のトロイア戦争の主役となって、復讐のドラマを演ずることになる。つまり、悪に染まった世界に生き続ける限り、この世界を支配する狂気と非情の掟については自分のものとして受け入れる他なくなる、ということだ。

『ベレニス』に描き出された世界が悪に染まっているというのではない。悪が蔓延していた『ブリタニキユス』のローマから、名誉と美德とに立脚するローマへと舞台は移っているとさえ言えるほどである。ところが問題は、その名誉と美德がはたして人間の精神を高揚させ、人間が喜んで受け入れられる——あるいは少くとも、いかなる犠牲を払い、いかなる苦痛を覚えようとも、それを受け入れることに本心から《よし》と言える——ものであるかどうか、という点だ。答えはどうも《否》のようである。

美德や名誉を求めると自体を悪とするのではないにしても、そこには悪を

なす時と似たような狂気と非情とが必ず要求されるからである。それに、美德とはそもそも何なのだろうか。仮にこれを《善》に向かおうとする人間の意志のあらわれとしておこう。だが、人間にはたして何が《善》であるか知る力があるのかという問題がまず生じてくる。それをさておくとしても、次には、いかにすればその《善》に近づけるのかという疑問が起こってくるだろう。ところが人間には、《いかにすれば》ということも、現実には、既に定められている《掟》に従うという形で行動するしか考えられない。その《掟》がたとえ神あるいは神々によって定められたとされるものであれ、人間自身がつくり上げ制度化したものであれ、事情は同じである。となると、皮肉な見方をすれば、美德とは結局のところ《掟》への服従にあり、そして名誉とはこの服従が完全であると認められた時に与えられるものと言えることにもなるだろう。そこには人間の感情が容れられる余地はない。恋によって美德に目覚めたティテュスが、ローマの掟に従うために恋を断念する。たとえそれが、ベレニスの愛と貞節を裏切り、彼女に対して——そしてティテュス自身に対しても——死ねと言うに等しい意味をもっていても、である。悪の支配、悪の存続から脱却しえたように見える世界であっても、人間は依然として不幸であり、自己の力ではどうすることもできぬ何かに縛られ、愛する者を裏切り、自分自身をも裏切って、絶望へと至るしかない。

皇帝即位の祝典で、全世界の祝福を受けるティテュスの栄光に輝く姿を、ベレニスは恍惚として思い出す。

昨夜のあの華やかな祝典を、フェニス、おまえも見たでしょう。

あの方の御威光のほどは、おまえの目にもやきついているはず。

〔……〕

あのおごそかな御様子、あの優雅なお姿。

ああ、なんとうやうやしく、心をこめて、

並居る人々すべてがあの方に秘かに忠誠を誓ったことか。(I. 5.)

この時はまだベレニスはティテュスの決意を知らずにいる。しかし、ローマの栄光と皇帝の威厳とが余すところなく示されたこの「華やかな祝典」の輝き

こそ、ティテウスとベレニスの別れを決定づけたものに他ならない。

美德の勝利、善帝の誕生、栄光に輝くローマの復活のドラマが主人公たちにもたらしたものは、結局のところ悲哀と絶望でしかなかった。皇帝も女王も王も、神格化されたローマの掟——というよりはむしろローマという非情な《神》の意志——の前にはなすすべもなく、彼らの美德もこの《神》の力をいやが上にも明らかにするだけである。

美德とは《善》に向かおうとする人間の意志のあらわれという仮定をもう一度むし返すとすれば、ここで再び疑問が生じてくるだろう。何が一体《善》であるのか、また、いかにすればその《善》に近づけるのか、それを果たして人間は知ることができるのだろうか。しかも、もっと悪いことに、この《善》が実はローマという《神》に象徴されるようなものでしかないとすれば、それを果たして本当に善と呼べるのだろうか。あるいはこれは《悪》が別の形、別の名をとったにすぎぬのだろうか、と。

人間を呪い、不当に罰する悪意に満ちた神々がやがてこの世界から姿を隠し、しかもこの世界になお執拗に存続していた悪からもようやく解放されたように見えるところまで来ていながら、人間はまた性懲りもなく新たな《神》をまつり上げ、美德と名誉の名のもとにこの《神》への忠誠を誓い、そうして自ら不幸を招き寄せる。しかも一度忠誠を誓ったが最後、この新しい《神》が古い神々と同様に冷酷非情であると気付いても、もはやその命ずるところに従うのがそもそも自己に課せられた運命なのだとして考えられなくなってしまう。また仮に自由を求めてこの《神》に反逆を試みたとしても、あるいはもう一步進んで自ら《神》にとって代わろうとしても、求めていた自由は得られぬばかりか、神となるかわりにネロンのような怪物となって次々と掟を破っては混乱と災いを生み出し、数多くの犠牲者の血を流した果てに、ついに自分も破滅することになる。そしてこの反逆者がネロンほどの権力を持たぬ時は、彼よりも力のある者——それもおそらくは《神》の代理人——の手にかかって滅ぼされるだけとなろう。

＊ ＊ ＊ ＊

前回『ブリタニクス』を取り上げた際、私は、ラシーヌが神話・伝説の世

界から歴史の世界へと悲劇の場を移した、と述べた。そして、神々不在の世界においても悪の存続の問題は依然としてラシーヌ悲劇の切実なテーマとなっている、とも。『ベレニス』では更に一步進んで、悪からの脱却、美德の誕生ないしは復権という問題がテーマとなっているように見える。しかしそれは、ティテウスがローマの栄光という《神話》にとらえられ、ローマという《神》の意志の中に自己の運命を見出さざるを得なかったところに『ベレニス』の悲劇が起こったのだ、とラシーヌが劇の題材を解釈したためだと思われる。人間がつくり上げたはずのローマ帝国という政治体が、いつのまにかそれ自体の意志を有する実体のごとく人間に意識されるようになったとき、ローマは《神》としてこの世界に君臨することになる。つまり、神々不在の世界においてもこうして新たな《神》が形成され、かつてのギリシャ悲劇における神々と同様に、人間の運命を支配するに至る、というわけである。

そして今この《神》は、ティテウスに対し、過去の英雄たちにならい、ローマの掟に従うことを要求している。何故ならティテウスはローマ人であり、しかも皇帝といういわば《神の代理人》として誰よりも先に忠誠を試される地位に即いたからである。だから彼がベレニスとの結婚をいくら望んでみても、彼がその血と共に、またその地位と共に受け継いだ過去から逃れ、掟に背き、《神》の意志に逆うことは、最初から不可能だったのだ。

確かにティテウスに要求されているのは、ネロンのような怪物となることではない。ローマの栄光の継承者にふさわしい美德を備えた皇帝となること、すなわちローマという《神》の第一の《僕》となることであった。それはティテウス自身が選び取ったものようでもある。だが彼は、皇帝となり、ローマに忠誠を誓う瞬間まで、それが実は何を意味するのか気付かずだった。掟から自由になり、ベレニスとの愛を成就するために選んだはずのことが、かえって彼を決定的に掟に縛りつける結果となったのを、彼はその時思い知らされたのである。自己に課せられた運命から逃がれようとする事自体が、逆に運命を招き寄せてしまうという悲劇特有の皮肉ないしは逆説が、ここにも見られるのである。

ところでローマはその僕たち——ティテウスが従うべき過去の英雄たち——に対していかなる運命を課してきたのだろう。自分を、あるいは自分の最愛の



ものを、この《神》の栄光のために犠牲にすることではなかったか。

……これまでも一度ならず、

ローマは私と同じ立場にある者たちの忠誠を試してきました。

ああ、あなたがローマの建国にまでさかのぼれば、

彼らが常にローマの命ずるところに従ってきたのがおわかりになるでしょう。

ある者は、誓いを守り抜くために敵地に戻り、

死をもいとわず、用意された処刑の場についたのです。

またある者は、勝利を得て帰還した息子の首をはね、

またある者は、涙も見せず、冷やかとさえいえる眼差しで、

息子二人が自分の命令によって息絶えるのを見守ったのです。

不幸な人々よ、けれども常に祖国と名誉とが、

ローマ人の中では勝利を収めてきたのです。(IV. 5.)

ローマという偏狭で残酷な《神》は、その掟に背いた者だけでなく、忠誠を誓う者たちに対しても、等しく《非情であれ》と命じているかの如くである。ティテウスが自分のことを「冷酷非情な人間」と言い、「あれほど忌み嫌われたネロンでさえ、これほどまでに残酷だったことはなかった」とするの、こうして見れば、あながち自己の苦悩を強調するためのレトリックとばかりは言い切れない。確かにそこには悲劇的效果をねらった作者ラシーヌの意図がはたらいっているだろうが、そこには同時に、悲劇詩人がローマ史をどう見たかという問題も実は隠されている、と私は思うのである。

ローマという《神》を生み出し、それに仕えてきた人間たち——ローマの歴史を担い、それを一種の《神話》にまでまつり上げてきた過去の英雄たち——は、いずれもこの《神》の《僕》もしくは《代理人》としての役割を演じてきた。しかしそのために、彼らは逆に自らつくり出したはずの《神》に支配されるに至ったのである。以来ローマ人は、ローマの名において世界に君臨することには成功したものの、自己の存在を確認するためにはこの《神》に自らを似せる他なくなってしまった。それゆえ、ネロンのように暴君となるのであれ、

あるいはティテウスのように善帝となるのであれ、《神の代理人》の地位に即いた以上、それに甘んずるか否かは別としても、彼らの力の源泉をなす《神》にならい、《非情》を自己の原理として受け入れる運命にあることは変わりない。ティテウスが自己をネロンに比較するのは、その意味で正しいのである。彼は「第二のネロン」とはなるまいとしたが、その代償として、美德の化身とでもいうべき《怪物》となってしまった。彼もまた、ネロンとは別のかたちではあるが、自由を求めながら過去に隷属する運命へと行き着き、ついに幸福からも見放されてしまった存在なのである。

もうひとつだけ付け加えるならば、アグリピヌスがネロンという怪物を生んだように、ベレニスはティテウスという美德の《怪物》を誕生させた。その彼女への報いが何であったかは、もはや語る必要もないだろう。

米 米 米 米

『ベレニス』は『ブリタニキウス』とは全く対照的な作品である。しかし、対照的であるがゆえに一層両者に共通するラシーヌ独自の悲劇性も浮かび上がってきたと思う。

悪を選び取るにせよ、あるいは悪を拒否するにせよ、人間の運命は結局のところ絶望へと至る道を空しく歩み続けることに他ならない。それが、ラシーヌが自ら創造した悲劇の世界に見出した真実なのである。——そう述べて、私は前回『ブリタニキウス』についての考察を終えた。『ベレニス』についても、どうやら同じことが言えそうである。

〔付記〕 参考文献は、この論考が完結した折、まとめてあげることにする。